資料紹介

オットー・ノイラート

小　林　　純

はしがき

今回，ノイラートに関わる資料５点を紹介する。始めに，それぞれの資料についていささかの説明をおき，併せて最近の研究動向の一端にも触れたい。冒頭におくべきノイラートの説明は資料【1】に譲る。

筆者はすでに資料【3】を利用した小論「幸福学者ノイラート――知識と実践――」を本誌(『立教経済学研究』60巻４号）に発表しているので，今回の紹介は，いわばその舞台裏の公開である。つい最近，2005年４月～2006年３月の在外研究の様を少し綴る機会があった。そのさい，在外研究の報告義務を充分に果たしえていなかったという反省の念が高まった。そこで，以前に手がけていた住宅地開発運動に関連する研究と帰国後にまとめたヴェーバー研究との接点に関わる資料を中心にここで翻訳紹介することで，責を果たすことにしたい。

なお上掲拙稿では，「社会主義的効用計算と資本主義的純益計算」(Sozialistische Nützlichkeitsrechnung und kapitalistische Reingewinnrechnung. In *Der Kampf*, Jg. 18, Nr. 10, 1925 : 391–395.）も利用しており，これをここに【４a】として邦訳紹介したかったが，紙幅の都合で外した。オーストリア社会民主党理論機関誌『闘争』には，同じ1925年にカール・ポラーニの論稿も掲載されており，この二本を素材にしてノイラートとポラーニをヴェーバー合理性論の批判的継承者と見立てた小論（『ヴェーバー経済社会学への接近』（日本経済評論社，2010年，第７章）は，【3】【4】の延長線上に【４a】を置いて考えたものであり，参照いただければ幸いである。

【1】ノイラートの経歴

資料の名称と所在をまず記しておく。

Text：Die Lebensdaten Otto Neuraths (1882–1945)

所在：ノイラート関係のファイル（Mappe)，Margarete Schütte-Lihotzky Nachlaß, Universität für angewandte Kunst Wien, Sammlung, A–1010 Wien, Postgasse 6/Mezz.

マルガレーテ・シュッテ＝リホツキー（1897年１月23日生まれ，2000年１月18日死去，グレ

ーテと呼ばれていた）は，オーストリアの女性建築家第一世代の一人である。帝国芸術産業学校（ヴィーン応用芸術大学の前身）で建築を学ぶ。母が友人のグスタフ・クリムトに請うて推薦状を書いてもらっての入学とのこと。1920年代初頭，ノイラートたちの住宅地開発運動に関わり，いくつかの住宅地の設計を担った[1)]。24年には，ノイラートの住宅博物館設立の陳情にも同伴したり[2)]，博物館に新たなコンセプトのキッチンを作ったりしていた。結核で活動を休止している間に住宅地開発運動は終息し，26年にドイツのフランクフルト市の同様の住宅建設プロジェクトに招かれヴィーンを去った。その際ノイラートは，彼女に，旧知のカール・グリュンベルク（すでにフランクフルトに移り，初代のフランクフルト社会研究所所長となっていた）あての紹介状を書いた。同26年，リホツキーは「フランクフルト式キッチン Frankfurter Küche」を考案，発表した。狭い住居にも適う作り付けの機能的な台所であり，この発表は住文化の革命的出来事であった。市参事会は労働者住宅一万世帯にこのキッチンを取り付けたという[3)]。上記のヴィーン応用芸術大学付設の博物館（同時に大学の資料室の機能をもっている）の一角には，このキッチンがそのまま再現されている。

彼女は27年にヴィルヘルム・シュッテと結婚した。ソ連と図像統計博物館指導の契約を結んだノイラートは，1931～34年にモスクワを訪れているが，社会経済博物館員マリー・ライデマイスターと一緒に行ったとき，モスクワでシュッテ夫妻の住居でマルガレーテと会っている。36/37年スターリンの大粛正の後，オーストリア・ファシズムに追われてハーグにいたノイラートとマリーを訪ねている。このときのことは，マルガレーテの回想録では「忘れてしまった」とされているが，マリーの回想録（【5】を参照）には若干記されている。ことはマルガレーテの共産党へのコミットの仕方に関わり，ここで安易に記すことはできない。1982年に出された『戦間期の労働者教育：ノイラートとアルンツ』（資料中にある展覧会に際して出版された）[4)] はノイラート研究の基礎文献であるが，これにマルガレーテの回想のうち，ノイラートに触れた箇所の一部が収録されている。この1982年に，その内容に関してマルガレーテとマリーの間に書簡のやりとりがあり，双方の書簡も同じノイラート関係ファイルに収められている。回想録は，本人の死後，出版された[5)]。当該部分は初出と同じである。

ここに訳出した資料【1】が誰の手で書かれたのかは不明である。私は，当然ヴィーン学団研究所長で，上掲書の編者であるシュタットラー氏が書いたものと思い，お会いしたさいにう

1）Nadar Vossoughian, *Otto Neurath. The Language of the Global Polis,* Rotterdam : NAi Publishers 2008 : 36–37. 設計図とダイニングキッチンの図案が掲載されている。

2）Friedrich Stadler (Hg.), *Arbeiterbildung in der Zwischenkriegszeit. Otto Neurath — Gert Arntz,* Wien : Löcker-Verlag 1982 : 41.

3）HP : http://www.fact–index.com/m/ma/margarete_schuette_lihotzky.html による。

4）注２）がそれである。

5）Margarete Schütte-Lihotzky, *Warum ich Architektin wurde.* Hg. von K. Zogmayer, Wien : Residenz Verlag 2004.

かがったところ，シュタットラー氏も初めて目にするものだ，という。彼の推測では，息子パウル・ノイラートが書いたのではなかろうか，とのこと。資料末尾ちかくの，オランダへの脱出劇やアメリカの結核撲滅運動への協力の記述などは，資料【5】のマリーの回想録に目を通したのではないかとの推測もできるが，確かなことは分からない。ともあれ，シュタットラー氏の感想のとおり「うまくできている」資料であり，また出自不明の謎もあって，ここに紹介することにした。下線は原文どおり。

【2】ベルリーン大学の時間割（1903年）

当初大学で数学を学ぶつもりでいたノイラートは，ザルツブルク[6]で会ったフェルディナント・テニエスの勧めで，経済学を専攻することにした。彼にシュモラーへの推薦状を書いてもらったノイラートは，大学が始まるとすぐに礼状を出し，そこに時間割を書いて，勉強の内容を伝えている。

テニエスに私淑し，父親のような感情を抱いていたノイラートは，1903〜18年にかけて，多くの書簡や葉書をテニエスに出しており，オーストリア国立図書館蔵のノイラート遺品のなかでもとりわけ貴重な資料となっている。残っているものだけではあろうが，その全文（独文）が，マリー・ライデマイスター（この時点ではノイラート夫人）とロビン・キンロスによる英訳版とともにタイプスクリプトで所蔵されているので，容易に読むことができる。

手紙は，数行の葉書からかなり長文のものまで様々であるが，（日付不明のものがあり，あくまで）一応の目安として数をしめしておく。1903年９通，1904年12通，1905年３通，1906年13通，1907年９通，1908年２通，1909年６通，1910年１通，1912年３通，1913年４通，1914年４通，1916年３通，1917年５通，1918年３通，である。あとは1920年１通（共同経済研究所通信員のお願い），1922年１通（近況と思い出），1929年１通（クリスマスの挨拶の葉書），となっている。

ちなみにこの書簡セットは，ヴィーン学団研究所のミクロフィッシェ資料目録にも載っており，2001年に訪問したときに請求したが，現物はなく，キールのテニエス文書館にあるはず，という話であった。国立図書館はこの遺品全体を1987年に購入しており，この書簡のファイルを1990年にはパウル・ノイラート氏が，2002年と2003年にはヴォソギアン氏がすでに利用していた[7]。調査能力の未熟さを恥じるほかない。

ここに紹介するのは，1903年10月31日の書簡に記された，ベルリーン大学冬学期にノイラートが履修した授業の時間割である。資料名称と所在を記す。

Text：Briefe v. Otto Neurath an Ferdinand Tönnies. Abschrift. ノイラート遺品中のフ

6）Otto Neurath, *Gesammelte ökonomische, soziologische und sozialpolitische Schriften* (*1*) Band 4, Hg. von R. Haller und U. Höfer, Wien 1998 : 1–7.

7）顛末は小林純『研究室のたばこ』唯学書房，2011年，260頁以下に記した。

ァイル。

所在：Handschriften-, Autografen- und Nachlass-Sammlung, Österreichische Nationalbibliothek, Josefsplatz 1, 1015 Wien.

なお機関名は利用当時のものである。改組されて2008年４月からはSammlung von Handschriften und alten Drucken とのこと。ウェブサイト http://www.onb.ac.at/による。

ちなみに資料【1】【2】は，経済学史学会関東部会での報告「オットー・ノイラートとその周辺――ヴィーン史料調査から――」(2006年７月15日，東洋大学）の際に配布した資料に，今回訂正を加えたものである。

〔3〕デカルトの迷子と予備的動機（1913年）

論理的に厳格な計算可能性や絶対的な確実さをもって決定することができないとき，全体状況についての経験的な判断にもとづく決定が必要となる。われわれがあることがらについての決定を迫られた場合，理性的推論の限界に達したとしたら，いわば直感に頼り，便宜的な根拠を採用することがある。この状況に立たされた人間の判断を，論理的および心理学的に分析したのが資料【3】の論稿である。

計画経済は可能か，を問うた経済計算論争の出発点にミーゼス (1921年) とヴェーバー (1922年）のノイラート批判がある。生産材（生産手段）を複数の用途の中でどれに充てれば効率が良いかを決定するためには，市場価格という指標の他に判断材料は存在しない。市場なき社会主義では生産財の市場価格も存在しえないから，社会主義の合理的運営は不可能である。というわけで，実物計算論者ノイラートはここで「負け犬」となり，これ以降，ノイラートを批判することによって市場経済の理解を深める，という「経済学」の学習方法が一般的となる。経済学の歴史では，ノイラートはいわば「噛ませ犬」の役割を担うこととなった。

だがポラーニが説くように，その「経済学」が「人間の経済」の実質を問うことのできない形式合理性の産物であること，またハイエクが強調するように，経済主体が市場の情報を完全に知っているという条件はフィクションであること，が問題として理解されるようになってくる。ヴェーバーは計画経済を形式合理的には不可能と解したが，ノイラートは実質合理的に遂行する途を探っていたのである。

経済計算論争では理性による財配分の可能性が問われ，合理性の限界を説くハイエクに軍配が上がり，ミーゼス，ハイエクを勝者，ノイラート，ランゲを敗者，とみなすことが一般的となった。しかし経済的諸要素間の通約不可能性という問題に着目したイギリスのＪ．オニールは，理性の限界を意識して似而非合理主義批判を展開する資料【3】を重視してノイラートとハイエクを勝者とする見方を提起した[8)]。

8）John O'Neil, Who Won the Socialist Calculation Debate?, *History of Political Thought,* 17–3, 1996 : 431–442.

ノイラートは，資料【2】に示したように，ドイツ歴史学派の経済学をその中心地で学んでいた。あらゆる要素が関連しあっていることの認識はまさしく歴史学派の伝統のコアにあったのであり，ノイラートはこの点を理解していた。このことを補助線の一本に加えることで，ノイラート解読のキーワードと思われる Ballung（包括性！）と「船」の比喩も少しは分かりやすくなるのではないか。また J．キャットは，Ballung の説明の文脈で【3】の参照を指示している[9)]。

テキストは著作集に収録されたものを利用した。著作集は５冊発行されており，第１巻と第２巻が哲学・方法論集，第３巻が図像教育論集，第４巻と第５巻が経済学・社会学・社会政策論集，となっている。第６巻には『戦時経済から自然経済へ』が入る予定と聞くが，編集の中心であるハラー氏が長患い（2010年12月23日付けグラーツ大アッハム教授の電子メイルによる）のためか，その書の幾つもの章が英語で Otto Neurath, *Economic Writings* (Vienna Circle Collection 23), Kluwer 2004 に収められて先に出版された。また資料【3】も英訳されている。書誌データは以下の通り。訳出に際して参照した。The lost Wonderers of Descartes and the Auxiliary Motive, in : Otto Neurath, *Philosophical papers, 1913–1946.* with a bibliography of Neurath in English ; edited and translated by Robert S. Cohen and Marie Neurath (Vienna Circle Collection 16), Dordrecht : Reidel, 1983 : 1–12. なお太字は原文では斜字体である。

Text：Die Verirrten des Cartesius und das Auxiliarmotiv (Zur Psychologie des Entschlusses). Vortrag, gehalten am 27. Janur 1913 von der Philosophischen Gesellschaft an der Universität zu Wien. In Otto Neurath, *Gesammelte philosophische und methodologische Schriften* Band 1, Hrsg. von R. Haller und H. Rutte, 1981 Wien : 57–67. (Orig. Jahrbuch der Philosophischen Gesellschaft an der Universität zu Wien 1913, S. 45–59.)

【4】共同経済研究所（1921年）

ドイツでミュンヘン・レーテ政府崩壊後に禁固刑の判決を受けたノイラートは，戦時中には同じ戦時経済省の同僚（部下）でもあったオーストリア外相オットー・バウアーの超法規的介入により刑期の途中で救出された[10)]。ドイツに入国しない約束でノイラートはヴィーンに戻り，

9）Stanford Encyclopedia of Philosophy のサイトには2010年になって Otto Neurath の項目および Supplement to Neurath : Political Economy : Theory, Practice, and Philosophical Consequences が掲載された。ちなみにキャットは *Otto Neurath : Philosophy between Science and Politics* (Cambridge UP, 1995) の共著者であり，そこでも Ballung の想原について検討している。

Cf. http://plato.stanford.edu/entries/neurath/ (First published Sun Aug 15, 2010, by Jordi Cat, 2010.)

10) Paul Neurath, Otto Neurath (1882–1945). Leben und Werk. In P. Neurath, Elisabeth Nemeth

活動を再開した。その第一歩となるのが共同経済研究所事務局長への就任である。そしてこの研究所の活動の一つに住宅地開発運動の支援があり，カンプフマイアーをドイツから招くなど運動を推進することとなり，ここからノイラートはこの運動の中心的指導者となった。

この共同経済研究所の実態について私は調べがつかず，また資料【4】を文献目録では確認していたものの実物は見ていなかった。この文書は，拙訳でも分かるとおり，組織の構成員から計画までをノイラートの手で明らかにしたものである。

前文と本文から成っており，本文は，ノイラート本人が報告原稿に手を加えたものをそのまま掲載したことが推測される。本文は，本来は活動・業務報告であるべきところ，いささか演説調となっており，事実報告のまにまに理想を主張するノイラートの姿が見られる。Die Wage 誌は通巻でのページ付けで，一号分は薄い。資料【2】【5】を含むノイラート遺品には，別のファイルの中に，ブレンターノに通信員を依頼した手紙も含まれている。また寄稿者のメーレンドルフには，19年の７月の裁判闘争のさなか，公務員として社会化計画立案が職務だったからあなたと同様であり，自分の無実を明かす証人となってほしい，と要請する手紙を出したが，それも残されている。また『共同経済通信』の一部はヴィーン労働者運動史協会にあった。

Text：Das Forschungsinstitut für Gemeinwirtschaft. In *Die Wage,* 25. VI. 1921 : 279–282.

所在：Österreichische Nationalbibliothek, Hauptlesesaal, Heldenplatz 1010 Wien.

【5】マリーの回想録より（1982年）

この回想録は，マリーがオランダのヴィーン学団財団（Wiener Kreis Stichting）元所長ムルダー（H. L. Mulder）に語るという形で作成が始まり，それをもとにマリーが仕上げたものと考えられる。Ａ４用紙にタイプで119枚のもの。ノイラート遺品中，もっとも興味深い資料（花形！）と私が感じているものである。

マリーは，ナチのオランダ侵攻の難をのがれてノイラートと一緒に（彼女はドイツ人なので脱出はノイラートの示した選択肢のなかから自身で選んだ途である）イギリスに逃げのび，オクスフォードに定住し，そこで結婚してノイラートの三番目の妻となった。ノイラートの死（1945年）以降，夫の遺品管理と ISOTYPE 研究所（1971年まで）の切り盛りを，ほぼ独力でやってのけた人物である。

回想は，人生の最初の記憶から始められ，19～20世紀のドイツ教養市民層に属する典型的な家族の娘としての経験の豊かな描写のあと，20年代からはノイラートの同伴者としての活動を伝えている。オットー亡き後の ISOTYPE 研究所活動も語られ，これも独自な意義を持つも

(Hg.), *Otto Neurath oder Die Einheit von Wissenschaft und Gesellschaft,* Wien : Böhlau Verlag 1994 : 48–52.

のである。一人の女性が自ら語る激動の20世紀史の貴重な証言となっている。

ここではヴィーン学団形成期の人脈・人間関係に触れた部分を紹介する。資料【1】での描写を裏づける記述が含まれ，人脈の多彩さも目を引く。併せてオットーの妻や息子が登場し，個人史の重要な情報も含まれる。連続する４パラグラフを訳出し，いくつか訳注を付した。

独文と英文での公表権はデルフト工科大学のメルテンス（Ferdinand Mertens）氏がもっている。全体の訳稿は，日本語の公表権がえられたら発表したい。

Text：Marie Neurath, An was ich mich errinere. ノイラート遺品中のファイル。

所在：【2】に同じ。

【1】ノイラートの経歴

オットー・ノイラート　1882–1945

オットー・カール・ヴィルヘルム・ノイラートは1882年，ヴィーンに生まれた。彼の父，ヴィルヘルム・ノイラート（1840–1901）は，この地で農業高等専門学校の経済学正教授となった。彼は，父とヴィーンの弁護士，公証人の娘ゲルトルート・ケムプフフェルト（1847–1914）が結婚してできた第一子である。国立ギムナージウムを卒業，大学で数学と物理学を専門として登録したのち，この若き博学の学生は経済学，哲学，歴史に取り組んだ。この時期に，物理学者で，のちプラハでアインシュタインの後継者となるフィリップ・フランクと，建築家ヨーゼフ・フランクの兄弟，そして著明な数学者で第一次ヴィーン学団の創設者であるハンス・ハーンと知り合い，交友が始まった。また彼の最初の妻となるアンナ・シャピレ，さらには２番目の妻となるオルガ・ハーンと知り合ったのもこの時期である。

1904年，ノイラートはシャピレとベルリンに向かい，当地で高名な経済学者グスタフ・シュモラーとエドワルト・マイアーの下で，学位請求論文「古代の商業・工業・農業観」を書いて研究を終えた。

スイスでの健康回復のための休息期間にノイラートは，1839年のルードヴィヒ・ヘルマン・ヴォルフラムのファウストへの文学史的序論 Literaturhistorische Einleitung in Marlows も書いたが，新版に付されたノイラートの解釈は500ページを超えるものとなった。

一年志願兵として軍役を終えたあと，ノイラートは，1907年から1917年まで新ヴィーン商業アカデミーの教員となり，1910年に経済理論の教科書を Hölder-Pichler-Tempsky から出版する。この本は文部省の高等商業専門学校の授業用としても認められた。

1911年，ノイラートの唯一の息子が生まれた後すぐに，妻のアンナ・シャピレ博士が死亡した。1912年に彼はオルガ・ハーンと結婚した。彼女はハンス・ハーンの妹で，22才の時に失明した。ノイラートはすでに1909年，彼女と一緒に新しい数学論理，つまり論理学のアルジェブ

ラに関する２本の論文を発表していた。1912年に彼はカーネギー財団から一年間の奨学金を得て，バルカン諸国における経済事情，戦時経済事情を研究した。戦時経済がもたらす経済的変動はずっと以前よりノイラートの主要関心領域の一つを成しており，彼は，戦争によって余儀なくされることの多い実物経済―貨幣なき商品流通―のうちに，国家による計画可能性の避けがたい形を見ていた。ノイラートはますます戦争の経済的諸条件に魅了され，自らも開戦後には後方指令部に関与し，また敵前での優れた功績により勲章を授けられた。

彼は組織力の才により，一年のうちに，ハイデルベルク大学に職位請求論文を提出し，しかもライプツィヒで戦時経済博物館の設立を行ないその館長を要請される，ということに成功した。

終戦時には，ノイラートにとって広義の政治的活動の厳しい時代が始まる。戦時経済と実物計算の理論は，社会化に，すなわち人間の幸不幸への作用を尺度とすべき新たな生活秩序の創出に取り入れられる。換言すると，生活状態の改善，つまり一般的な生活条件および幸福条件の改善がノイラートの社会エピキュリズムの最終目的である。「野蛮経済から計画経済へ」の移行は，生活状態が予測可能にして全体として改善されてゆくべきときに通る道である。これによると，例えば，主婦は自分の自立した活動と，自分の子供達の教育とに対して賃銀の請求権を有する，なぜなら後者も全体社会にとって不可欠な仕事を果たすのだから，ということになる。

ノイラート自身，彼の社会化理念がマルクスのそれと一致していることをしばしば引き合いに出してはいるが，そうした一致が表面的にしか主張し得ないことは明らかである。なぜなら方法においても内容においても真の一致は存在しないからだ。私見では，ノイラートはむしろ，マルクスとは一定の政治的目的は共有しているが，政治哲学はおよそ共有しない社会理論家・社会主義者たちの一人なのである。ノイラートの著作には，弁証法はおよそ存在せず，社会化実現のための特定の政治組織もなんら存在しない。このことは，社会主義のマルクス主義ヴァージョンとの，二つの主たる相違となっている。

ミュンヘンのレーテ共和国で社会化計画を実現しようとしたノイラートの試みも，こうした観点から検討せねばならない。彼は1919年にバイエルン中央経済局長官に指名された。この職にあって夢想家ノイラートは，実物経済的な生活状況向上という自己のテクノクラート的提案を実施するという期待を抱いた。レーテ共和国への関与のため，彼はその崩壊後に――第二レーテ共和国ではすでに解任されていたにもかかわらず――１年半の城塞禁固という判決をうけた。これには結局オットー・バウアーの介入がなされたが。

ヴィーンに戻ってから，まもなく彼は共同経済研究所の，そして住宅地開発・小菜園連合の事務局長となる。住宅地家屋の計画にさいしてヨーゼフ・フランクやアドルフ・ロース，ヨーゼフ・ホフマン，オスカー・シュトゥルナート，グレーテ・シュッテ＝リホツキーなどといった建築家の協力をえるのに成功したことは，ノイラートの特別の功績として強調されねばならない。この分野においても「住民の生活の幸福こそ住宅政策を評価する尺度たらねばならぬ」

というノイラートの格律があてはまった。1923年にはヴィーン市の支援の下にヴィーン住宅地開発・都市建設博物館が設立され，そこから一年以内には，a) 労働と組織，b) 文化と生活，c) 住宅地開発と都市建設，という部門から成る社会経済博物館が生まれた。その広範囲に及ぶ活動については1982年の展覧会が子細を報告することになる。

いわゆるヴィーン式図像統計の開発はこの時期のものである。これはヴィーンの人民・労働者教育という教育運動との結び付きを意識しており，「統計とプロレタリアート」を接合させて，ここでもまた生活状況を改善すべきものであった。図像概念の標準化された体系によって，教育の欠けたところでもコミュニケーション手段が作り出され，啓蒙がなされるはずであった。というのも図像を通じて示しうるものは，言葉で言い表わす必要のない，またできないものだからである。こうして一種の新たな象形文字が開発された。その多くは今のわれわれにはあまりにあたりまえになっているため，その起源を調べることなどおよそ試みられずにいる。幾度もの展示会を通じてこの新企画はまもなく世界に知られ，外国との――例えばバウハウスとの――結びつきが始まり，1927年には新市庁舎のフォルクスハレに常設展示が設けられた。ついにはヴィーンの教育担当市参事が図像統計を実験校に導入し，教育用図像文字の文書館が博物館に付設された。

ヴィーン・モデルはついに他のところでも模倣された。1931年にノイラートはモスクワに，この地で同様の博物館を設立するために招かれる。そして30年代にはベルリーン，ハーグ，ロンドンに支所ができた。ノイラートは合衆国，スカンディナヴィア，ユーゴスラヴィア，ギリシアでもこの方法の普及にあたった。

この開発は，いわゆるヴィーン学団の創設と平行している。これは，今日なおわれわれがその発展を期待すべき今世紀のオーストリア哲学の世界的認知を基礎付けた哲学者集団である。ヴィーンの哲学者集団のなかでも最も有名なこの集団には，すでに今世紀最初の10年の末に，第一次ヴィーン学団という先行者があり，そこでは Ph. フランクや H. ハーン，ノイラートが，マッハやデュエムやポアンカレやアインシュタインの科学理論を，そしてみなに共有された経験主義と規約主義との緊張から生じてくる諸問題を，議論していた。この第一次ヴィーン学団の主要テーマは，かくして，論理―経験主義的基礎にたつ厳密科学の哲学であった。そしてこれがまた，われわれがその名を知るヴィーン学団の会議での主要テーマであった。つまり第一次の集団では数学者，物理学者，そして数学の素養のある経済学者が問題となるかぎりは，哲学者を議論の仲間に得ようという欲求があったのも，当然のことであった。

だが，ノイラートの義兄であるハンス・ハーンが数学教授としてチェルノヴィッツに，ついでボンに招聘されたことを含む長い期間の後，1922年になってようやく，ハンスのヴィーンへの帰還（1921）により，かつての第一次ヴィーン学団の新たな活性化の機会が訪れた。それは，ハーンがヴィーン大学哲学部で大きな影響を与えたモーリッツ・シュリックの招聘実現によって可能となった。ヴィーン学団の核を成したのは，ハーンをとりまく数学者集団であった。こ

こではただ，グスタフ・ベルクマン，クルト・ゲーデル，オルガ・ハーン，カール（K)・メンガー，テオドール・ラダコヴィッチ，フリードリヒ・ヴァイスマンの名を想起するだけでよかろう。彼らはみな数学のゼミナール出身者であった。

さてヴィーン学団の歴史は，ここではさらに立ち入ることができないけれども，長いこと神話の陰になっていたが，この神話がようやく明かされ始めている。そしてこの神話は論敵たちによって造られたのではなく，学団成員たちの自己理解をも刻印していたのであり，社会的運動として，また国際的に登場した哲学者集団としてのヴィーン学団の中心的組織者であるノイラートの作品をも刻印していたといえよう。この誤った像の核心は以下のような信仰にあった。それは，経験主義的反形而上学をフレーゲとラッセルの数学的論理学の基礎の上に新たに定式化した新ヴィーン実証主義が，一個の普遍的統一科学（scientia universalis）という自己の目的のために，統一的な科学者共同体の模範事例をも成していた，という信仰である。

これは間違いである。というのも，シュリックを囲むグループがすぐにヴィトゲンシュタインの影響を受けるようになり，1927年からシュリックやヴァイスマン，カルナップ，ファイグルが，国民学校教師を辞めたヴィトゲンシュタインと個人的にも接触したのに対して，ノイラートはトラクタートの教説には強い疑念を抱いて反対したからである。彼には，言いうるものと言いえないものという二言語理論は粗暴な形而上学への後退であり，それゆえこの種の哲学を克服することが彼には学団の主要課題であった。こうしてノイラートはヴィーン学団ではヴィトゲンシュタインの対極となった。シュリックについては「彼の活動は，ヴィーンの学問的雰囲気の歴史的展開にうまく順応」したと言えるし，この潮流の中でも綱領文書はリベラルな運動とその反形而上学的精神，テオドール・ゴンペルツとフリードリヒ・ヨードル，エルンスト・マッハとルードヴィヒ・ボルツマン，フランツ・ブレンターノとマイノンクの対象理論学派，ヨーゼフ・ポッパー＝リンコイスとルドルフ・ゴルトシャイト，C．メンガー以来の経済学のヴィーン学派，最後にオットー・バウアーやルドルフ・ヒルファディング，マックス・アドラーというオストロマルクス主義の思想家たちを強調している。

彼らはみな，ヴィーン学団という革命的哲学者集団の先駆者であり，この集団は，「エルンスト・マッハ」協会の公開フォーラムに参加して科学的世界観を強力にしようと望み，「私的公的生活の，教育の，建築芸術のあらゆる形式に浸透して，経済的社会的活動を合理的諸原則にのっとって造形することに力をかした」。

「エルンスト・マッハ」協会が1929年に設立され，この年に新経験主義の綱領文書『科学的世界観。ヴィーン学団』が出された。同年に学団は，プラハでの厳密科学の認識理論会議で，初めて国際的に登場した。1930年からは，「エルンスト・マッハ」協会およびベルリン経験哲学協会の会員機関誌だった『哲学年報』の後継誌として，雑誌『認識』が発行された。1930年には第二回の厳密科学の認識理論会議がケーニヒスベルクで開かれた。1934年には科学の統一性の準備会議がプラハで行なわれ，翌1935年に第一回科学の統一性国際会議がパリで，1936年

に第二回がコペンハーゲンで，1937年に第三回が再度パリで，そして1938年に第四回が英国ケンブリッジで，それぞれ開かれた。最後となる第五回は1939年９月にマサチューセッツ州のケンブリッジで開かれた。シリーズものの「科学的世界観叢書」はフィリップ・フランクとモーリッツ・シュリックによって編集された。1934年には「統一科学」シリーズがヴィーンで，1938年には「統一科学百科」がシカゴで，ノイラートによって始められた。これらすべての活動をノイラートは中心的に，しかも一部は独力で担ったのである。ヴィーン学団はその影響力の原動力を彼に負うている。

1934年の２月闘争の後，ノイラートはオーストリアを離れ，活動の場をオランダに移した。ここではすでに以前よりヴィーン・モデルに倣ったムンダネウム（Mundaneum）が設立されていた。オーストリア・ファシズム政府はエルンスト・マッハ協会を解体し，ヴィーン社会経済博物館を閉鎖して，さらなる活動の一切の可能性を閉ざした。ノイラートは故郷の街に二度と戻ることができなくなった。ヴィーンの資料の一部は救出され，ハーグに運ばれた。この地でもノイラートは飽くことなき活動を開始した。ヴィーン学団の組織者活動と併せて，図像統計の仕事が体系的に継続されたが，1936年ロンドンで出されたノイラートの『国際図像言語』はその成果である。ほぼ同時期に彼は，合衆国のために，結核撲滅を目指して５千回の開催を予定した大展示会の準備を行なった。

1937年ノイラートの妻オルガが亡くなった。同年彼は，「科学と産業博物館」設立のためにメキシコ・シティーに呼ばれた。

ドイツのオランダ侵攻後，ノイラートは後に３番目の妻となるマリー・ライデマイスターとともに，1940年５月，冒険潭を地でいく英国への脱出劇を行った。英国での抑留所から1941年に解放された彼は，新たに図像教育研究所を始めた。1942年には ISOTYPE（International System of Typographic Picture Education）研究所が設立され，またノイラートは様々な都市計画に携わった。1944年に，ノイラートの「社会科学の基礎」の論稿を収めた統一科学百科の第二巻がやっと出された。

これまでの基盤の上でさらに仕事ができるという戦後の希望のすべては，彼の突然の死によって消されてしまった。1945年12月22日，オットー・ノイラートはオクスフォードで亡くなった。

290をこえるノイラートの学問的著作は，おのずと以下の５つのグループに分けられる。

（１）経済学および戦時経済にかかわる著作，
（２）政治と社会化にかかわる出版物，
（３）図像統計と ISOTYPE の仕事，
（４）社会学の著作，
（５）哲学および方法論の著作。

これに，さらに文学に関する仕事（多くは匿名で出された），マルロフのファウストの文学史

的研究，そして大量の往復書簡が加わる。

〔2〕ベルリーン大学1903年冬学期の時間割（10月22日に開始）

	3時	4	5	6	7	8
月		ブライズィヒ：中世史 人文主義，ルネサンス		シュモラー ゼミナール		
火	ジンメル 社会学					
水	ヤストロウ 社会問題	シュモラー 実践的政治経済学		Ａ．ワグナー 社会問題*		
木		ブライズィヒ 中世史	ブライズィヒ 階級史**			
金	ジンメル 社会学			メンツラー：カントの純粋 理性批判		
土			シュモラー 実践的政治経済学			

*Frage とのみ記載。**Klasseng. と記載。

〔3〕デカルトの迷子たちと予備的動機（1913年）

デカルトの迷子たちと予備的動機（決定の心理学について）
1913年１月27日，ヴィーン大学哲学協会における報告

私は，デカルトの『方法序説』の中の注目すべき一節を，この報告の出発点として取り上げたい。この著作で著者は，**理論的研究**の諸規則と並んで，**実践的行為**の諸規則をも論じているが，その諸規則は，デカルト倫理学の叙述では，たいてい不充分にしか評価されていない。デカルトはとりわけ以下のような諸原則を提示している。

「私の第二の格率は，私の行動において，できるかぎりしっかりした，またきっぱりした態度をとることであり，いかに疑わしい意見にでも，いったんそれをとると決心した場合には，それがきわめて確実なものである場合と同様に，変わらぬ態度で，それに従い続けること，であった。どこかの森に迷いこんだ旅人たちは，あちらへ向かったり，こちらへ向かったりして迷い歩くべきではなく，いわんやまた一つの場所にとどまっているべきでもなく，つねに同じ方向に，できるだけまっすぐに歩むべきであって，その方向を彼らに選ばせたものがはじめはたんなる偶然にすぎなかったにしても，少々の理由ではその方

向を変えるべきではないのである。というのは，こうすることによって，旅人たちは彼らの望むちょうどその場所には行けなくとも，少なくとも最後にはどこかにたどりつき，それはおそらく森のまん中よりはよい場所であろうからである。うえの格率において私はこういう旅人に倣おうとしたのである。そしてそれと同様に，実生活においてもそうである。われわれは，**個々の可能性の射程を見通すことができぬままに**，しばしば行為せねばならぬ。より真なる意見を見分けることができない場合に，より蓋然的なるものをわれわれがとるべきであるという，このこと自身は，きわめて確実な真理なのである。のみならず，**たとえわれわれは，どちらの意見が蓋然性をより多くもつかを認めえないような場合でも，われわれはやはりそのどちらかをとることを決心せねばならず**，しかもいったん決心したあとは，実行に関するかぎりその意見をもはや疑わしいものとは見ず，きわめて真で確実なものとみなすべきである。なぜならば，われわれをして，それをとることを決心せしめた理由そのものは，真実で確実なのであるからである。そしてこういう態度によって私はこのとき以来，かの心弱く動かされやすい人々，すなわちあるときあることをよいと認めてあやふやな態度で実行し，あとになってまたそれを悪かったと思うような人々の，良心をつねに悩ます，後悔や悔恨のすべてから，脱却することができたのであった。」(野田又夫訳，『世界の名著デカルト』 中央公論新社，1967年，182–３頁)

こうした言葉によってデカルトは，実践的行為の領域における彼の**断念**を定式化している。原則として彼は，我々が不充分な洞察しかもたずに行為せざるをえないことを承認している。さてこの思考経過は彼の世界観にはどう適合しているのだろうか？『方法序説』 第二部で彼は，有名な４つの理論研究のための規則を示している。すなわち，人は，明確な認識のみを真とすべきである，問題はすべて個別的部分問題へと分解すべきである，問題をその複雑さに応じて整序すべきである，どんな問題設定においても充分な洞察を追求すべきである，の四つである。

デカルトは，人は，理論の領域では，**最終的に真である**と認めた一連の連続する命題を通じで完全な世界像に到達することが出来る，と考えた。彼はこの努力には大きな自信を持っているが，これは先に確認した断念とは著しい対照をなす。「何ごとも，最終的に到達しないほど困難なものはなく，発見できないほどに隠されているものはない。」だが，いまだ十全な洞察に達していない者は，どう行為すべきか？この目的に対してデカルトは，人が完全な洞察に到らない限りで妥当させねばならぬ実践的行為のための暫定的（予備的）諸規則を定式化している。不充分な洞察の時でも行為せねばならぬという必要性は，「非行為」でも一つの「行為」――決定の結果――なのだ，ということからすでに生じてくる。だが，生起の経過は我々の決定に依存している，ということこそまさしく重要なことだ。デカルトは，理論的思考を行為(Handlungen）の下には数え入れていない。この見方は，人が，狭義の行為では可能ではないが，思考ならしばらくの間は引き延ばしうるが，すでに述べたように，非行為も行為として

見なされざるをえない，と言うことで支持されうるかもしれぬ。ただこれに対しては，思考と同様になされる多くの活動が存在するではないか，という異論が出される。たとえば，家の建設をしばし中断し，続けるべきか否かを，できるだけながく保留することができる。こうすれば建設に最適な時期というものが失われ，すでに建てられた部分が傷むことになるわけだが，じつはまったく同じことが思考についても当てはまるのである。思考についてはこう主張できるにすぎない，思考は，人が活動に着手する時点と遂行の速度とからは比較的独立した活動に属するものだ，と。いずれにせよここではただ思考と行為の程度の差だけが問題なのであって，原理的な差ではない。『哲学の原理』でデカルトは思考と行為を鋭く分けている。

> 「この疑いはただ真理の観想の場面のみに限られるべきである。というのは，実生活に関する限り，われわれが疑いから脱却しえないうちに，行動する機会が去ってしまう場合がはなはだ多いゆえに，たんに真実らしいというだけのものを受け入れざるをえないことはまれでないし，二つのうち，一方が他方よりも真実らしいということが明らかでなくても，やはりどちらか一方を選ばざるをえぬことさえときにはあるからである。」(野田訳，331頁)

この意味で，三つの暫定的な道徳規則が定式化される。ひとは通例の法，慣習，宗教観に適応すべきである，不充分な洞察であっても精力的に行為すべきである，世界秩序よりも自身を変更すべきである――これはおよそストア的な見方だ。

暫定的な規則がないと困るのは実践的な領域だけである，と考えたのは，デカルトの根本的な誤りであった。一つといわず多くの点で思考もまた暫定的な規則を必要とする。時間の限られた人生ということがすでに，われわれを前へと突き進めるのだ。見通しうる将来に世界像を完全なものとする，という望みは，暫定的規則を必要物たらしめる。だが原理的な契機もまたデカルトの見方に反駁している。世界観あるいは科学的体系を創出せんとするものは，**疑わしい前提をもって作業せねばならない**。全くの白紙から出発して，最終的に正しいと承認された命題をつないでいくことによって，一つの世界像を創出しようという試みは，いずれも必然的にいかさまだらけである。われわれの出会う諸々の現象は，命題の一次元的な連鎖では記述されえないほど，相互に結びついている。それぞれの命題の正しさは，他のすべての命題の正しさと関連している。世界に関する命題のそれぞれは，他の無数の命題を同時に暗黙裏に利用することなくしては，およそ定式化することなどできない。またわれわれは，先行するすべての概念構成を利用しなければ，一つの言明を下すこともできない。われわれは一方で，世界に関する命題それぞれと，他のすべての命題との結びつきを確認せねばならぬが，他方で，すべての思考系列とこれまでの思考系列との結びつきをも確認せねばならない。われわれは，手持ちの概念世界を変更することはできるが，それを無視することはできない。それを根底から更新

しようとする試みは，いずれも，その性質からしてすでに，既存の概念の子なのである。

では，世界考察の領域における暫定的な規則はどういうことになるか？　人は，前進するためには，同程度に蓋然的な多くの仮説の中から一つを決定せねばならぬ，という状況にしばしば置かれることになる。思考の領域における暫定的規則の不可避性があまり明確に理解されぬのが常だということは，おそらくは，人はいわば複数の理論的活動を同時に遂行できる立場にある，という事情と関連しているのであろう。人はしばしば，重要にして大胆な思考の試みを沈黙裏に敢行し，上手く行かないときには別の試みに着手することができる。これに対し，たとえば多面的な職業訓練をこういうやり方で試みることはできない。人は，ちょうどいろんな遠足を企てるように，様々な光学理論をいつも同じ出発点から展開することができる。だが，一定の問題設定の前に，いかなる思考連鎖を採ったのかは，けっしてどうでもよいのではない，ということは見過ごしてはならぬ。人間の全生涯中の思考は，一つの心理学的統一体であり，ただ限られた意味においてのみ思想の歩みそれ自体を言うことができる。デカルトは再三思考経過について論じているが，彼はそれを論理的関係の一体系のように扱っていて，当然ながらその体系それ自体はその発生を負うている心理学的経過とは何らかかわりがない。デカルトは，どんな思考経過でもつねに新たに始めることが出来るという可能性を見ているように思われる。だが，もし人が，一つの仮説を終わりまで考えるのに，それだけで全生涯を必要とするとしたら，それゆえ，研究全体を締めくくる以前に，二度と引き返せない道を取ることを決定せねばならないとしたら，いったいどうすべきなのか？たしかに思考の領域では，こうした事例はそれほど頻繁ではない。もし別の前提を採っていたら，ある思考経過はどう進んでいたか，と想像するとき，人はすでに第二の可能性を実行しているが，狭義の行為の領域だとこれは当てはまらず，「それはどうなりえたか」の想像は，ここでは生起の実現からは遠いものしか意味しない。最も重要な思考行為は任意にくり返せるが，人間の活動の重要な行為にあってはそれはたいていは当てはまらない。生起の一回性がここでは特徴的なものとなる。「ひとは同じ流れを二度登ることはできない。」ヘッベルのマリアンネも祈りの中でそう叫んでいる。

「あなたは自分でなしたことのないことをなした。あなたは廻した
時間の歯車を反対に。いま再び
かつてあったごとくとなる。ならば彼には別のように
こんどはやらせてみよう。」
(Friedrich Hebbel, Herodes und Marianne, Act 3, Scene 6)

われわれは，思考の領域で，また狭義の行為の領域で，一回だけの生起と複数回の生起とが生じるのを見てきた。そもそも疑念が生じうるということは，結論が決して一義的に出てこないような周知の，ないし未知の諸前提が置かれているということから起こる。そこに，思考の

領域であれ狭義の行為の領域であれ，ある特定の途を決定せねばならぬ，ということが起こりうる。デカルトは，必要な決定を即座に，かつ意志の弛緩なく行ないうる必然性を強調する。だが彼は，人が不充分な洞察を根拠に採った決定をどのようにして実行すべきかを描いているけれども，私は以下で，デカルトに関連させて，そうした**決定が経験的に実現する**のはいかにしてか，という問題を扱うことにする。

多くの事例で行為者が様々な行為可能性を考察していかなる結論にも到達しえない，ということをわれわれは見てきた。それでも彼が一つの可能性を実現するために，それを取り上げ，その際に一般的な原則を利用するのであれば，われわれはそのようにして創出され，しかも問題になっている具体的な目的とは関係のないこの動機を，**予備的動機**と名付けよう。なぜならこれは，動揺している行為者をある程度は助けるからである。

予備的動機が最も純粋な形で現われるのは，くじ引きにおいて。複数の行為様式から一つを決定することが洞察を通じてはもはやできない人は，くじ引きに頼ることができる。あるいは同じことだが，不格好にこう説明することができる。自分は「何かあること」をなすか，あるいは，いわば疲労に決定をゆだねることによって，いずれにせよ問題となる動機の外部にあって，タロットカードの「星」を［きまぐれに］引くオウムと同じ範疇に入れられるような審理機関にゆだねることで，動揺のなかでどんな決定が勝利するのかを待つ，と。

ここに描いた心の状態がこれほど明確な姿で見出せるのは，近代的社会類型の人間の場合だけである。彼らは，自分の行為の大部分を，長い思考連鎖のなかで目的と手段を厳密に測って検討することで，個人的な洞察に依拠させることに慣れている。だが伝統的な人間もまた，時に選択の困難さを意識する。とりわけ，伝統によっては充分に決定されないような行為に直面する場合には。また相互に矛盾する伝統に面したときにも，彼は苦しい状況に陥る。あらゆる種類の人間が一切の考慮も助けにならない状況に陥る，ということを想定することができる。ナポレオンのような偉大な軍事指導者がしばしば反省によって特定の行為を採る決定ができない，ということを疑うささいな余地もないのである。にもかかわらず，多少なりとも容認されたボタン数えの方法は，たいていの現代人にとっては，嫌悪あるいは大笑いの対象なのである。しかしこの現代人も完全な洞察を手にしてはいないのであるから，人はいかなる**間に合わせのボタン数え**を応用するか，が問題となる。

多くの場合，**直感的行為**がなされるけれども，これがすべてをまかなうことには決してならない。だが，これは疑念の余地がないからと，多くの人からは高く評価され，その有効性もしばしば誇張して描かれる。実際，多くの人は，およそ純粋な目的合理性の問題が焦点をなす場合にすら，直感的な行為を望んでいる。まずは反省し，次にその反省が機能しないときに初めて直感にたよることができる，というのが多くの人の意見である。これは直感を誤用した見方である。なぜならこの見方は，直感をいわば代用品として意識的に導入しているが，一方で直感の意義は，例えおそらくは反省が直感に代わりうるとしても，初めから直感が支配的なとこ

ろで表現されるのだ。だが予備の位置にある直感は，心理学的に疑念の余地あるものではないか。人が直感的行為の意義を高く評価するときにこそ，人は直感をそのように誤用すべきではない。社会秩序や近代的技術の意識的に作り出された諸制度が示すような，複雑な合理的諸関連の中では，直感の機能は否定されざるをえない，ということをはっきりと自覚せねばならぬ。直感の意義とは，一つには，冷静な計算がほとんど役に立たぬようなときにあっては，直感はおよそ動揺を生むことなく，その方向で力の浪費を避けてくれる，というところにあるのは確かだ。洞察が支配し，それがたとえば動揺を生むことで呼び起こした弊害を自ら再度そっくり除去するのを待たねばならぬというのは，世界には良くないことなのではないか。

こうして自然は母の義務を引き受ける，
鎖が壊れぬよう，
車輪が破裂せぬよう見守る。
いつの日か世界の構築を
哲学が統べてくれるそのときまで，
自然は動きつづける，
飢えと愛とを通じて。
(Schiller, Die Weltweisen/Die Taten der Philosophen)

直感が退くところでわれわれは，無力な動揺に向かう徴候の一切を何らかの方法で排除しようとする無意識的な傾向に，しばしば出会う。これには，神託や前兆，預言やそういった類いのものへの信仰も一部含まれる。これを私は，たとえば前兆を信じるような人々が，この前兆への信頼は自身には有効であり，それゆえ守られるべきだという見方をもっているかのように解することはしたくない。事態はむしろこういうことだ。この前兆の価値の捉え方は別の原因に由来するのだが，それは個人の感情の性質の問題であって，こういう人には疑念をなくすことが不快感からの解放を意味し，そのため心ならずもそういった思考様式が熱心に望まれるのである。偉大な軍事指導者や政治家，その他の活動者の場合にしばしば観察される迷信への傾向も，私はこういう具合に理解したい。そのさいはっきりと強調されるべきは，こういう人たちが同時代人の精神に較べてしばしばはるかに迷信深く，また，その迷信の諸形態がときに著しく原始的ないし古代的だ，ということである。このことは，こういう迷信では，心霊論(Spiritismus) や他の同様の運動にしばしば見るように，後の反省段階の産物が問題なのではない，ということのさらなる証拠である。上述した類型の人間が，機会があると，自己の本来の迷信的な性向を後付けで体系化したり根拠づけたりすることもあるのは当然である。このことをきちんと見ておけば，なぜ，先の展開についておよそ不確かな政治的激動の時代にこそ，心霊論と類似の思想潮流が容易に地歩を得るのか，ということも理解できる。とはいえ，われ

われがここでこれ以上論じることのできない他の諸事情もそこには作用している。たとえば，将来を知りたいという願望が大きな役割を果たすのであり，しばしば見られるように，弱気の性格のために力強く出来事に関与することのできないような諸個人にあっては，まさにそうである。こうしたタイプの人は，もともと複雑な形態の預言につよく傾き，しばしば，可能な限り合理化された予見の構成物を自ら生み出す。こうしたものへの広汎な執着は，意思の空白を埋めるのに役立つに違いない。だが意思の弱さのこの産物は，すでに示したように，行動力ある個人が自分の決定能力の強化に利用することもある。

同様に，別の種類の権威も，動揺を取り除くのに役立つ。たとえば，難しい事態にあって多くの人は，煩わしい疑念から解放されたいと願うが故に，好んで聴罪師やあるいは別の助言者を訪れる。彼らが自分の態度に関してこうした権威者の前で反省してみるとき，その態度の衝動的な基礎が自覚されないのはもっともなことで，彼らは後から自分の行動を助言者のヨリ高い洞察で動機付けようと試みる――これは時としてじつに的を得ることもある説明である。だが，疑いがあって賢者に助言を請う場合には，問題は一段階動いているのだ。というのも，この場合には，この賢者がどんな熟慮をもっても決定に到らないとしたら，彼はなにをなすべきか，が問われるのだから。一つの決定をもたらそうという指向性は他のところでも切実なものだが，これは，たとえば，投票の際に多数が成らないときは議長が決定する，という事実を例に引くことができる。実際，多数決原理それ自体は，もっぱら，係争を取り除き，何らかの決定をもたらすという目的に役立つのであって，その決定がもっとも賢明かどうかは問題ではない。多数決原理は，多くの人には平静願望の決着かもしれない。そして多数決原理は，それがしばしば好まれぬくじ引きの好まれる代用品をなすことにより，行動能力を高めてくれる，というだけの理由から誰にでも歓迎されるというなら，それは良いことだろう。仲裁裁判官もしばしばこれと違わぬ役割を演じる。また中世やルネサンス期のイタリア人が，内部闘争を止めるために，しばしば原則的にほかの都市からポデスタ（長）を迎え入れる場合，平静への指向性がここにも作用していた。そしてある都市の住民にとって，彼らが呼び寄せた非党派的な人物がとりわけ洞察力に恵まれているかどうかなど，もはやとりたてて問題にはならないのがしばしばであった。

本能が疑念を芽のうちに摘み取り，予兆への信仰が疑念を即座に片付け，外面的にはまったく別の性格をもった多くの制度が，ひとつには，洞察が充分でないところでは何らかの決定を，また何らかの［困難を伴う］事態のあり方には突破を，もたらすのを助けるように作用する，ということをわれわれは見てきた。そもそも唯一の行動可能性しかもたないという制約状況もまた，当然ながら同じ作用を及ぼす。

今日では，本能は，文化の大中心地域では著しく後退してしまい，迷信も演ずべき役をほとんどもたない。多くの現代人は自らの洞察を誇り，あらゆる事柄で唯一これに決定を委ねようとする。彼らはその際，以下のような見解から出発する。つまり，充分な反省があれば，いか

なる行動様式が，成功を導くための，確実さは無理だとしても，ヨリ大きな蓋然性をもたらすかを，少なくとも確定することが出来る，という見方だ。人が複数の行動可能性を前にしてまったく寄る辺のないままとなるようなケースが生じる，などということは，否定されるか，あるいは，理性的な人間ならそんなことについてもう考える必要はない，およそありそうもないことなのだ，と説明される。この種の人間は，通例，困難が生じたら，ヨリ冷静な反省が目的にまで導くに違いない，と考える。その際彼らは，最も冷静に考える人でも，前提が誤っていれば複数の等価の結論に達することがある，ということを完全に見過ごしている。自らの洞察ですべてが片付けられるという信仰に執着する人は，そもそも，デカルトが科学の発展の遠い目標として提示した完全な世界認識を先取りしている。この**似而非合理主義**は一つには自己欺瞞へと，また一つには偽りへと導く。教育と性格がこうした誤謬を支える。合理主義の父として扱われるのが常のデカルトは，先に見たように，実践的行為の領域ではこの誤謬を逃れていた。似而非合理主義者は，まさしく厳格な合理主義が論理的な理由からして充分な洞察をすでに排除している場合にも自らその洞察を得たふりをするなら，真の合理主義に対して不正を働いているのだ。そのときどきの洞察の限界を鋭く認識するという，まさしくこの点にこそ，合理主義の中心的な強みがある。私はかくも広まった似而非合理主義への傾向を，迷信への傾向と同様の無意識的な指向性から導出してみたい。人は，一義的な決定を可能とするのに適したそれまでの通例の手段を，押し寄せる啓蒙によってどんどん奪われていった。そのため人は，なんとしてもしかるべき代用品をそこから得ようとして，洞察に身を預けたのである。似而非合理主義，ことを支配して未来を告げる諸力への信仰，そして予兆への信頼，これらはみなこうした方向において共通の根をもっている。似而非合理主義者はつねに自己の洞察を根拠に行動しようと望み，それゆえ，己れが洞察から行為したのだという自覚を自分に示唆してくれるものには誰であれ感謝する。こうした心情の性向は，たとえば代議士が選挙演説で出会うような，著しい批判の欠如を充分に説明する。聴き手は，いわば，ある事柄について堂々と自分で決定できるときは，嬉しいのである。この願望はたいてい原始的な性質のものだ。話し手がこの事実を知っていれば，彼の行為は笑劇となるが，その場合彼の目的は**合理性を示唆する**ところにある。話し手，とくに政治家の示唆的作用を心理学的に分析することがすでに始まった。話し手の扱う議論はその際には，彼が党同胞の共感を勝ち取るために選ぶ帽子の形と同等のもの，と考えることが出来る。もし心理学の教育が広まって，ほとんどの市民が示唆の装置を見すかしてしまったら，何が起こることになるか。示唆はこの心理学的啓蒙によりたぶん無力化され，人々は洞察を示唆してもらえなくなる。彼らが迷信や本能，あるいは全くの偏狭さに戻らないとしたら，彼らに残されたものは，洞察がもはや効かないところで予備的動機に頼る以外にはない。それが，「何かが起こらねばならぬ，われわれが誤った認識としてすでに排除してしまった後には，それがわれわれに何をもたらそうと，あれかこれかを，為そうではないか」といった議論で満足すのであれ，あるいは，洞察が効かない地点に達したとき，人は正式にく

じ引きするか，そうでなければ事柄内部に備わっていない一つの契機に決定を下させる，ということであれ，同じである。

だが，公的にそのように振る舞った政治家の哀れなることよ。彼がある具体的な事例において，二つの選択肢の間でなんら決定できず，それゆえくじ引きに決定させようという洞察に到ったら，彼はいかがわしいとか冷笑的だという批難に晒されることであろう。民衆感情はこのうえなく傷つけられよう。旧来からのものへの固執か，あるいは合理的に基礎づけられた修正か，どちらか一方が望まれる。その際，近代の政治家は以前よりもはるかに自己の不完全な洞察を自覚することになる，ということは知っておかねばならない。過去の政治家は，しばしばその時代のすべての知識を手にしたのであり，指導的な経済学者であることもまれではなかった。一方，今日の政治家は，他人の方が間違いなく彼よりもよく知っている領域で活動せねばならない。たとえばコルベールとテュルゴーは当時の最も重要な経済学者に数えられるが，ビスマルクは経済学者としてはマルクス一人にも同等視されるものでないのは明らかだ。政治活動は今日では極めて多くの力を必要とするので，偉大な政治家が同時に偉大な理論家たりうることは困難である。国家の運命を導く人々は，最大の洞察をもたないのが通例であって，より多くの洞察を有する人々は国家の指導とは関係ないのが普通である。にもかかわらず，ボタン数えはいかがわしいとされ，しかも問題となる案件が重要であればあるだけ，それだけいかがわしいとされる。普段は一切の敬虔さや伝統を欠いている人間ですら，洞察がもはや機能しないときにくじ引きで決定することを提案されると，道徳的に憤慨するのがつねである。トマス・ホッブズの宗教に対する態度は，それゆえめったに同意をみない。どんな秩序でもないよりはましである，という彼の思想は，充分な反省によって決定に達することを期待するすべての似而非合理主義者を憤慨させる。ホッブズの不寛容は純粋に外面的なもので，政治的に承認された目的への手段なのだ。彼は，積極的な宗教のうちのどれが選好されるべきかを決定することなどできない，と感じていた。われわれには，ホッブズのこの態度が，誠意ある一人の合理主義者に起こった生涯の数多の事件の中で，唯一可能なものであるかのように思えるのだ。もちろん，合理主義が公的活動を規制するのにそもそも適切であるかどうか，ということは別問題であるが。だがひとたび伝統と共同体感情が動揺したときには，無条件にくじ引きに到ることと，思考と感情を偽る似而非合理主義との間での選択があるのみである。

予備的動機の価値が実践的にはいかに確証されるか，というのは経験的な問題である。それが一般的に承認されると，たとえば，反省がさらなる展望をもちうる時点でさえも，人がそれを利用する，ということになるだろう。これは危険なことであって，くじ引きの代用品がたとえば宗教的な手段の形で出てくるような場合と同じである。すでにギリシャの詩人が警告している。

「まずは自ら仕事に就け，それから神に助けを求めよ」(Euripides)

予備的動機が十全な行為集約度をどこまで開花させるかは，個人の心理学的機構にかかっている。予備的動機がいつの日にか一般的に利用されるか否かは，いまだ分からない。それは今日すでに，自らの洞察の不完全さを自覚しており，迷信をはねつけ，にもかかわらず力強く行為せんとする賢者にとっては，実践的意義をもっている。予備的動機だけが，彼の正直さを犠牲にすることなく，彼の意思を強めることができる。彼は，活動のために自らの視野をわざわざ狭める必要はない。予備的動機を用いるべきか否かためらう人，その利用を忌避する人，そういう人には助けにならない。ボタン数えを「イエス」か「ノー」で始めるのを自分で決められない人にも同様に助けにならない。だがこれは決して予備的動機への批難ではない。それは，すべての人の助けになりうる，という一般に承認された原理などでは決してないのだ。

予備的動機は，伝統と合理主義の一種の仲介を可能とするのに適しているといえる。昔の予兆とくじ引きが内面的意義をもっていたのに対し，いまやその意義は純粋な手段となっている。だがことは同じままだ。予備的動機の主唱者は，伝統的な人間や，自らの本能に従う人間に対し，多くの似而非合理主義者を特徴づける高慢さをもって立ち向かうことは決してない。彼はおそらく，共同体生活において伝統と本能が決定的であった時代が終わったのを残念に思うであろうし，必要なら，予備的動機を，合理主義の発展により必要となった代用品として扱うこともある。この意味で，本能，伝統，予備的動機は，似而非合理主義の共通の敵である。予備的動機の利用は，すでに高度な組織段階を前提している。というのも，全人のある程度の共同行動があってはじめて，人間社会の崩壊は防がれるのだから。行動の伝統的な一様性は意識的協働に置き換わらねばならない。その際，人間集団が意識的に協働しようと心構えることは，本来，諸個人の性格からおのずと導き出されるべきものである。

さてデカルトの比喩に戻ろう。森の中で途に迷い，決定的な方向を決める何の手がかりももたない旅人にとって，一番大事なのは，精力的に進むことだ。第１のものをある方向へと突き動かすのは本能であり，第２のものは予兆に動かされる。第３のものは，慎重に万が一のあらゆることを考慮に入れ，ありうる根拠と反対の根拠とをすべて検討し，欠陥があることも自分には分からない不充分な諸前提のもとで，最後には誇り高く背筋をのばして自分で正しいと考えた一定の方向に進む。最後に第４のものは，できるかぎりの反省を試みて，しかも自分の洞察が貧弱すぎることを認めるのに尻込みせず，静かにくじ引きに決定をゆだねる。四人の旅人が森を抜ける可能性はみな同じとしよう。にもかかわらず，四人の態度に極めて異なる判断を下す人がいるだろう。洞察を最も高く評価する真理探究者にとっては，最後の旅人の態度が最も共感できるものとなろうが，似而非合理主義的な第３の旅人の態度は最も反感を抱かせるであろう。

多分われわれはこの四つの態度様式のうちに，人類の四つの発展段階を見ることができる。そのそれぞれが完全に実現されたなどと主張するつもりはない。だが，本能，権威，似而非合

理主義，予備的動機という四つの時代の本質を明らかにしようと試みるならば，多くのことが分かってくるだろう。今日われわれはなお似而非合理主義の時代に生きているが，それでもすでに衰退の明確な徴候を確認することができる。多くの人が宗教の新たな隆盛を待ちうけている一方で，他の人々はより本能的な生活が戻ってくることを期待している。さらには，われわれの文化の崩壊を不可避と考える人もいる。ここで私が，合理主義の首座としての予備的動機に，将来を託そうと試みるのは，以下のような考慮を根拠としてのことである。われわれは様々なやり方でユートピアを構成することが出来る。それはたとえば，最も発展した形態がさらに発展すると考える，とか，将来の諸形態の萌芽を探す，という形であってもよい。たとえば，われわれは，一切の国家的事象が組織的にあらかじめ計算されるような時代に近づいている，という観念を構築することもできよう。ここで，そんな状態が間もなく登場するなんておよそありえない，ということを示すのは，いささか行き過ぎであろう。しかしわれわれは，だれもその将来を予測していなかった中世においてすでに合理主義がその提唱者をもっていたように，すでに存在してはいるが，なお充分な開花には達していない諸々の運動をうかがい知ることも出来る。およそなにか新たな一つの精神的方向を想像することなど，極めて困難であるから，ことによっては予備的動機がいつか私的公的な活動に強く影響を及ぼすことになる，という可能性を，もっと真剣に考えてみるのは，いずれにせよ利点のあることだ。

デカルトは激動の時代に生きた。当時はあらゆる分野で本能と伝統への戦いが，こうした諸力の機能について正しく知ることなしに，始められた。デカルト自身は，すでに見たように，道徳的領域では，一方で伝統を意識的に認め，他方で予備的動機を承認した。その際，首尾一貫した合理主義者は彼に従うことが出来た。合理主義にとってそもそも道徳的領域での将来があるというなら，その限界の自覚的な確認と予備的動機の導入とが，絶対の前提である。だが将来がどうなろうと，**合理主義と欠陥ある洞察**とが**予備的動機**の助けとどう結びあわされるか，という問題を論じるのは価値のあることではないか。

【4】共同経済研究所（1921年）

オットー・ノイラート博士
共同経済研究所

６月23日，連邦社会行政省長官ロベルト・バルチ Bartsch 博士を議長として開かれた共同経済研究所総会において，事務局長オットー・ノイラート博士は，就任１年目の研究所の活動について報告した。以下，研究所の目的と課題全般に関する若干の注記を補って，この報告の基本部分を掲載する。研究所を運営するのは以下の方々である。顧問官ロベルト・バルチ博士，国会議員エミ

ー・フロイントリヒ，J. ヨアヒム博士，部局長アドルフ・フェッター博士，顧問官フリードリヒ・ヘルツ博士，フェルディナント・ハヌシュ市議，ケーテ・ピック博士，ルドルフ・アラース博士，オスカー・コクシュタイン博士，市財務統制官ルドルフ・ゴルトシャイト。

さまざまな世界観の持ち主たちが，われわれの生活秩序を共同経済的な意味で作り変えることを，不可避と考えている。その研究と準備は，共同経済の経済秩序を支持するものにとってのみならず，それにはただ妥協するのみで，それを可能な限り自己の見解に従って作り変えようとするものにとっても，緊急の要請と思われる。

共同経済研究所は，同名の協会により設立され，理論的実践的な方法で共同経済を，しかも一国的ならびに世界経済的組織において，促進することを目的とする。公的部局および民間組織に支えられ，様々な陣営の諸兄諸姉が集って，将来に備えるべくこの研究所を設立した。あらゆる方面の協力を通じて，国内消費と外国貿易に関して何がなされうるか，確固たる合意ないし公的権限を基礎として，様々な経済部門・経営・個々の労働者の，つまり全経済の達成能力を促進させうるのはいかなる組織的方策か，を明らかにするために，オーストリアのための経済計画が起草されるべきである。

その際，計画的管理経済の中央統制は，住宅地開発運動や協同組合，労働組合運動および経営評議会運動，共同経済的活動のための自由な農民・手工業者の団体，国有化，自治体所有，および他のさまざまな社会化と同様に扱われなければならない。またあらゆる福祉活動の中央組織には，課題全体の枠組みの中で特別の考慮が払われるべきである。本研究所は，国際的な原料およびエネルギー統制，国際的商品清算（交換），世界経済会議，世界経済計画に向けられた努力に注目すべきである。

本団体の課題には，また以下のものが含まれる。研究・学習の場の創設と促進，資料収集や文書室，図書館と読書室，啓蒙と情報提供の場，そして国内外の交流を促し，通信報道サービスを組織する共同経済的経験の交換のための中央機関の創設。研究所はその成果を，民間および公共の組織，職員や団体および自治体等の利用に供し，組織内外で文書室の設置や，個々の経済問題の調査と鑑定，基本案の策定，組織計画と起草の支援を引き受ける。

講演会や印刷物の刊行，展示会は，学問的特種目的にのみならず，実践的にも学問的専門教育や一般的民衆啓蒙に資することとなる。専門グループ別に編成される中央委員会は，役職や職業，あるいは恒常的な協力を通して研究所の仕事をとくに促進する諸兄諸姉を一ケ所に集める。専門委員会は，現在のおよび歴史的な，例えば食糧や住宅地開発に関する問題について，中央委員会の構成員と外部の専門家から構成される。

初年度の経験は，共同経済の学問的研究が著しく不十分であることを示している。また，全体としてこうした研究を促進しようという関心が乏しいことも示した。当初計画よりもかなり

ささやかな規模であるとは言え，本研究所がそもそも作業を継続できることを，ごく少数の個人，組織，公的部局の犠牲的精神に感謝すべきである。利用可能な運営資金は，現在のところ経常的サービスをまかなうのに足りるのみ，である。それにもかかわらず研究所は，一連の重要な作業を行い，共同経済の本質についての啓蒙を進めることができた。一連の委員会では，いつも計画的経済構成の思想が扱われた。ときには，例えば職業相談と職業再編成の議論は，一方に職業相談，他方に仕事仲介・斡旋の両方を含む包括的な構想の枠内に経済教育のための中央部局を設立することについて，草案にまで煮詰まった。この議論に関連して，専門家の協力のもとに，ドイツ諸都市やその他の地域の職業相談組織をカバーする資料収集がなされた。職業相談の委員会の議論も，都市の経済計画をとくに食糧に関して扱った委員会の討論も，われわれは目下のところ，批難の余地なき計画的な生活形成を可能としてくれるようなデータを持っていない，ということを明瞭に示した。それゆえ，わが国の全経済生活の内的関連を示すべき全体統計（Universalstatistik）の包括的全体構成を得るためには，専門家が統計的概算を使って既存の不十分なデータを補うことが必要であろう。様々な領域の専門家にたえずこうした作業への関心を持たせる努力は，これまでのところうまくいかなかった。というのも，統計的制御および一定のランダム・サンプリング調査のための基礎資料を調達するのに必要な金銭的手段すら欠けているからである。それでもなお，統計中央委員会の指導者たちによって促進された適切な討議は，極めて有益な刺激をもたらした。

あらゆる共同経済の経済計画という思想が要求されただけではない。共同経済の実施に対して直接的意義をもつような諸組織にも，特別に注意が払われた。ドイツの経営評議会組織に関する，またイタリアの労働者会議所，イタリアの農業協同組合と諸組織に関する資料が収集された。これにより，ローマの労働組合の構成を，図式的に比較できる叙述によって一目瞭然に表現する作業が始められたが，この作業はあと数カ月の内に終了できるはずである。

オーストリアの住宅地開発運動を協同経済的な意味で促進する当研究所の努力は，直接に実践的な意義を有していた。一連の討議の中で，この領域では計画的な処置のみが問題になる，ということがとりわけ強調された。土地の私的所有は，それに関わっている土地および建築物の投機を避けるために，排除されるべきであろう。住宅地開発運動の経済的意義は過大評価されるべきではないとしても，それはやはり，共同経済へと向かう，そしてあらゆる弊害を備えた大都市の解体へと向かう発展の方向にある。当該問題の権威ある取扱いを確保するために，当研究所は，ドイツのバーデン州住宅監察官ハンス・カンプフマイアー博士を一連の講演および討議のためにヴィーンに招いたが，ここから，彼をヴィーン市住宅地開発局長に任命するという結果となった。

研究所は，専門に詳しい報告者による長めの覚え書きにおいて，学生労働の可能性を扱った。そこでは，適切な組織の支援のもとで１日４時間の労働により学生が生計費を稼げるであろうことが示されている。当研究所のこれに関する提案は，すでに，プラハ国際学生会議での討議

対象となった。

当研究所はまた，市財務統制の指導的代表者オスカー・コクシュタイン博士とヴィーン市行政管理局長フランツ・ミュルナー氏の委託により自治体諮問局を設置した。近年，自治体に関して，非専門家では克服困難な新たな課題が生じてきたため，このグループは，自治体経済と自治体管理について，専門家を用立てることで，自治体経済，簿記会計制度，行政等々の領域の作業で，とくに以下の課題を引き受けることで当該担当者を支援することになる。見積り作成，決算書と決算報告，会計監査，会計検査制度の創設，決済制度の再編，新税導入および既存の税の再編成，など。

多くの自治体は，会計および行政の情報だけを必要としていた。だがある自治体は，全経済制度の新編成を提起して，かなり大規模に自治体諮問局の援助を要求した。当研究所は包括的な草案を作成したが，これは現在，当該自治体の諮問に応じている。この新たに構成される経済組織は，自治体の住宅地開発にとってもまた意義なしとはしないであろう。

当研究所は，他の領域においても助言や組織化を行うことができた。とくに，建設労働者中央連合に対しては経済組織の創設を支援するという努力がなされたが，これはとくに住宅地開発にとっても重要である。

学問的な啓蒙を進めたのは，とりわけドイツ語と英語で出される『共同経済通信（Korrespondenz für Gemeinwirtschaft)』である。これは数百部出され，とくに，一連の大組織に配付された。この通信は，一定の立場に拘泥せずに共同経済の諸問題を議論することに努めた。通信は，とくに以下の諸氏の論考を掲載した。エミー・フロイントリヒ（ヴィーン)，リヒャルト・フォン・メーレンドルフ（ベルリーン)，I. G. H.（ロンドン)，ロベルト・リーフマン教授（フライブルク i. B.)，K. バロット教授（リガ)，エドゥアルト・ハイマン教授（ベルリーン)，他，である。

当研究所は，講演を通じて共同経済の諸問題に対する関心の喚起に努めた。すでに触れたカンプフマイアー氏の他，カール・バロット氏がオーストリアの経済計画とロシア経済の諸問題について話し，カール・レンナー氏は協同組合と共同経済についての講演を行った。

共同経済運動の発展は，共同経済を指向するすべての組織の総括統合をますます要請している。この数カ月の間に共同経済同盟が創設された。その幹部には，連邦長官・リート市建設担当市議ヴィルヘルム・エレンボーゲン博士，国会議員エミー・フロイントリヒ，オットー・ノイラート博士が所属している。事務所の指導には，ケーテ・ピック博士が当たっており，彼女は同時に国家社会化委員会職員である。この同盟の構成員は，連邦社会化委員会，労働組合委員会，消費組合経済委員会，労働者会議所，共同経済機構，共同経済機構の経営評議会連合，である。住宅地開発中央連合と当研究所は，同盟の枠内で，学術的課題および出版関係の課題を依託された。

当研究所は，統計作成の組織的活動に対して学術的センターを創出しようと試みてきた。そ

うした部局が現時点において無条件に必要である，という認識が一般に行き渡るまでには，なお若干の時間がかかるであろう。それまで，飽くことなき細かい作業を通じて，将来もっと広範な活動を行うための基礎を創出しなければならない。政治的・経済的目的に直結しない諸機関の存続が極めて困難であることは，火を見るがごとく明らかである。また実に多くの人が，諸機関は闘争の機関としてのみ考慮に値する，という見解を主張している。だが，旧来の経済の断固たる克服を主張する人でも，事情によっては，党派政治やら経済政策などに縛られずに共同経済的諸問題に心からの関心を示す人々との結びつきをつくり出す可能性を与えるような，中立的なフォーラムを創設することは，歓迎できるだろう。当研究所は，多くの問題の解明に過小評価すべきでない意義を果たしたフェビアン協会と，多くの類似点をもっている。

オーストリアが，共同経済研究の集結点として，つねに広範な影響力をもつ場を有しているというのは，重要なことである。

〔5〕マリーの回想録より（1982年）

1929年はまた，ヴィーン学団宣言の年，そしてプラハで第１回大会（厳密科学の認識論について）が開かれた年でもあった。オルガと私は大会に参加した。そこで私はクルトとも再会した。彼は，私の記憶する限りでは，ヴィーン学団の議論に積極的には参加していなかったけれども，同時にドイツ数学者協会もそこで開かれていた。私はまたゲッティンゲンから来た知人にも再会した。「科学的世界観」の講演で学問世界における再登場の初回を迎えたオットーは，いささか緊張ぎみだった。会場の後部で私は数学者がこう言っているのを聞いた。「まあ聞けよ，こりゃサーカスだ。」ヴァイスマンのことを思い出すと恐ろしくなる。自分の講演の最中に脈絡を失ったのだ。司会をしていたフィリップ・フランクは，なんとか話がつながって先に進むまで，何分も待った。

私がオットーの家で一緒に聞いた議論の方がずっと密度が高く，生産的だったように思う。カルナップ[11]はヴィーン時代の最初からシュロスガッセをよく訪れていた。彼は緑のソファーに横たわり，オットーはその足下に座った。はじめは世界の論理的構成がテーマだった。話はねばりこく，少しずつ進んだ。オットーは懐疑と困難の予測からすすめたのに対し，カルナップは定式化の厳密さを言った。対話はこの二人にとって，とても生産的だったに違いない。それを私がここで再現できないのは残念だ。私が彼の定式化から，秘書には期待してもいいはずのものをなにも受け止めたり収集したりしなかったのは，オットーにはやはり失望だった，と私は思う。彼はよく，タイプライターを前に座っているときよりも，自由に話しているときの方が，もっとたくさん良いことが頭に浮かんだのだ。カルナップはしばしば，ナイダー，ヴァ

11) カルナップ　1891～1970年。ドイツの哲学者。論理実証主義の代表的論客。ヴッパータール生まれ。1926年ヴィーン大学に職を得た。ノイラートとの往復書簡が大量に残っている。

イスマン，ローゼ・ラント，ファイグルといった人と一緒に来た。そのうち何人かは一人で来たこともあった。フェリックス・カオフマンは，しばしば妻と一緒に来た，愛すべき人たちだった。しかし実りある対話となるためには，意見の一致という基礎はあまりに少なかった。ヴィーン学団宣言の議論が始まったとき，ノイラート夫妻はアルントシュトラーセ１番の公営住宅に引っ越していた。そこにハンス・ハーンとカルナップが訪問したことを覚えている。そこでは，タイトルをどうつけるか，とか，ヴィトゲンシュタインと統一科学が話題になった。民主的な妥協がなった。「君たちはヴィトゲンシュタインの方を望むんだな，よろしい。なら僕には統一科学を譲ってくれなくちゃ。」

カルナップとクルトは一度も会わなかったが，私には実に残念なことだった。私から見るとカルナップは兄と同じタイプの人間だった。彼の北ドイツ的な厳格さは，青年運動を通じて和らいでいた。庭園の真ん中にたてられた木造の家に私は一度オットーと一緒に招かれた。彼は私たちのために，ミュンヘン出身の女友達も招いていた。その後彼はイナを連れて来たが，彼女とはのちに結婚した。イナは時々一人でオルガを訪ねた。善良で賢明な聞き手を必要とするときには，好んでオルガを訪ねる，という人はいつもいた。私とオルガとの生活には，およそ争いがなかった。始めの，まだそれほど忙しくない頃，私は彼女に，例えばストリンドベリの「夢の戯曲」などを読んであげた。私たちは音楽も一緒に聴いた。もっとも私は彼女のヴァグナー熱には与しなかったし，彼女がモーツァルトを軽蔑したのは理解できなかったけれど。私はよく彼女と腕を組んで歩いた。そうするとよくお話ができたし，「階段下ります」「階段上がります」と言うのも会話の邪魔にはならなかった。私は一緒にオルガのお母さんのところに行った。同じ家にはオルガの姉ルイーゼと彼女の夫ワルター・フレンケルが住んでいた。二人はお弟子さんと私の一緒のポートレートを描いた。ルイーゼの絵の方がずっとよく似ていた。ルイーゼは私に，その絵を私のお母さんにと，くれたのだ。オットーとオルガと一緒に行ったある日曜の遠足のことだけは覚えているが，三人でラインツ動物園にでかけたのだ。そこで見たすばらしいブナの老木は，ぜひもう一度見てみたいと思っていた。それ以外の日曜は，オットーと私が山歩きに出かける時には，オルガはお母さんを訪ねていた。オルガは，お母さんのところまで路面電車に乗っていくのは，乗り換えがあるにもかかわらず，一人でできた。オットーが，乗り換えがあろうとどんな道であれ彼女に修得させるやり方を，新しい住まいに移った時に，私も共に体験した。一番大切なことは，彼女ができるかぎり自立的になることだった。そうやって彼女は友人を訪ねてゆくこともできたのだ。彼女がある夫婦を訪ねることを，オットーは必ずしも良くは思っていなかった。彼から見ると，この夫婦はあまりにカトリック的でありすぎたから。でもオルガは，私がこの人たちに興味をもっているのだから，と言って，その後も通っていた。彼女はオットーの息子，パウル[12] と多くの時間を一緒に過ごした。彼は，

12) パウル　1911～2001年。社会学者（統計，人口論他）。ダッハウ収容所の体験をもつ。スウェーデンを経て米国に亡命，ラザースフェルドに学ぶ。1990年にこの回想録に目を通している。

ある施設で子供の時期を過ごさねばならなかったが，その後11歳でオルガとオットー夫妻のところに来た（彼の母親，アンナは彼が生まれた数週間後に亡くなった)。彼は，いまや自分ひとりのための母親を得たことを喜んでいた。私が来た時には13歳だった。彼はよくオルガのひざに座って，彼女をさすっていた。彼女はパウルの話を聞いてやり，宿題を手伝った。その時の彼女は，皮肉屋と言えるほどすごく厳格だった。パウルは数理統計の立派な教師だということだが，数学で彼がずいぶんと苦労し，宿題でオルガが面倒を見たことがその肥やしになっていることなど，誰も知らぬだろう。

オルガを訪ねる客の中にオットー・ロベルト・フリッシュ[13]がいた。彼はギムナージウムの生徒として来て，彼女から初めて四次元空間のことを聞いた。彼がこの話をしてくれたのは，その約30年後，ケンブリッジで原子物理学の教授をしていた彼を訪問したときのことである。原子核の内部を説明する子供用の本のために私の書いた草案を，日曜二日をまるまるつぶして検討してくれた。彼は一度，私を王立協会での自分の講演に招いてくれた。そこはかつてファラディーが有名な連続講演[14]を行った場所だ。また別の折に私は，フーク・ファン・ホラントからワーウィックに向かう船の中で，彼とその妻に会った。私はちょうど彼のおば，マルタ・タウスク[15]の訪問から帰るところだったので，私たちがこんなにも親しい関係にあることを彼は喜んでくれた。(彼のおば，リゼ・マイトナーにも，フィリップとハニャのフランク夫妻とともに，おおきな集まりのときに一度お会いした。）マルタ・タウスクとはすでに1924年にグラーツで知り合っていた。その数年後に私は，彼女のところに数日間招かれたことがある。それ以降，私たちはずっとコンタクトを保っていた。彼女は精神分析家の夫と別れ，二人の息子がいた。兄のマリウスは医学生で，ときどきシュロスガッセにノイラート夫妻を訪ねて来た。彼ものちにオランダへ亡命し，私たちはここで再会した。その後マルタも1938年にはオランダに亡命した。彼女は私たちを訪ねて来た。三人でスヘーファニンゲンの浜を散歩したことは今でも覚えている。オットーは彼女のことを，もう年をとるのを止める決心をしたみたいだ，といささか不思議に思っていた。

ある日のこと，マルガレータ・ホフマンがバイオリンを携えてオルガのもとに現れた。彼女は私と同い年で，最初から私には気に入っていた。彼女のおじ，グスタフ・ヘルグロッツは数学者で，彼女に「オルガ・ノイラートになにか演奏してあげなさい，彼女，喜ぶから」と提案していたのだ。私は「グレートル」と何度も会った。彼女をオットーの講演に連れていったこ

13）フリッシュ　リゼ・マイトナーが亡命先スウェーデンでオットー・ハーンと協力し，核分裂の物理的なプロセスを考えて放出エネルギー量を計算したのに立ち会い，デンマークでその追試に成功した。

14）ファラディー（1797–1867）の講演　『ろうそくの科学』のもとになったクリスマス講義。また彼は現在まで続く金曜夜会講話（Friday evening discourses）も始めた。

15）マルタ・タウスク　1881–1957. 20年代にグラーツで活躍した女性政治家。終戦直後，オランダでのオーストリア人亡命者の保護活動を主導。

ともある（彼女はいまだにそのテーマが「歴史の中の神」だったことを覚えている）。彼女は私をある動物行動学者のところへ一緒に連れていった。彼は私たちに，それこそ本当に様々な動物の動き方を真似して見せた。部屋にはつがいの猿もいた。グレートルはそのそばに座らなくてはならなかった。この猿たちは，彼女のそばにいるとき一番おとなしくしているから，というので。ある時私はオットーに言った。「私って，なんでグレートルのこと，こんなに気に入ってるのかしら。」でも彼は全然驚きもせず，彼女がとびぬけて愛らしく，善良な人なんだよ，と答えた。そして彼女は今にいたるまでそのままなのだ。彼女は，多くの人たちにとって，なにか癒しのような存在であるに違いない。例えば彼女は工業家連盟のある人のところに，彼がそう望むからというので，しょっちゅう行っていた。マックス・ボルンと妻ヘディも，彼女がゲッティンゲンにおじを訪ねた時は，えらく喜んだ。あるとき（1934年か35年）彼女は一時期ハーグの私のところにいた。その前にはオクスフォードにいたが，そこではシュレディンガー[16]が彼女と一緒に散歩やサイクリングをしていた。彼女はけっして学問的な教養はなかったけれども，好奇心がすごく旺盛で，いまだにそうだ。ハーグからヴィーンに帰る途中，彼女はブラウンシュヴァイクを通った。彼女は私の両親にナチスへの熱狂を公然と示したのだ。父は，私にナチの友人がいることに驚いた。でも私たちはお互いにこの見解の違いについてはまったくオープンだった。グレートルの父は「ズデーテン＝ドイツ人[17]」で，そのためナチの宣伝に乗ったのであり，グレートルは父の味方だった。後年になってから彼女は目が覚めた。服従拒否のために彼女は危険に陥った。追求から逃れたのは，のちに彼女の夫となった人のおかげとしなければならない。戦後，彼女は，当時の他のナチスと同様に，救援奉仕作業を行わねばならなかった。彼女はそれを当然と考え，そして作業を喜んで引き受けた。

追記：さきに私は，研究の新段階を示す *Otto Neurath's Economics in Context*（ヴィーン学団年報）の書評で，残された論点の一つとして，イテルソンの影響の検討を挙げておいた（『経済学史研究』51-1, 2009：108）が，本稿の校正中に，Gideon Freudenthal and Tatiana Karachentsev, 'G. Itelson — A Socratic Philosopher'（in J. Symons, O. Pombo, J. M. Torres eds., *Otto Neurath and the Unity of Science*, Springer 2011：109-126）を目にすることができた。フロイデンタールは，ロンドンで存命中のマリーからイテルソンに触れたオットーの書簡（【2】と同じファイルにある）を見せてもらっていたのである。

16）エルヴィン・シュレディンガー　1887-1961。ヴィーン生まれの物理学者。波動力学の研究に功績。1933年ノーベル賞受賞。

17）ズデーテン＝ドイツ人　ドイツ国境ぞいに住むチェコスロバキア内のドイツ系住民。民族対立が激化し，ヒトラーがこの地域をドイツに併合する方針を宣伝した。